

論文

## 雑誌『北京文藝』における文革期知青文学

瀬 邊 啓 子

〔抄 録〕

文芸界の文革の導火線となったとされる「海瑞罷官」が掲載された雑誌『北京文藝』に、文革期に掲載された知青文学について分析を行った。雑誌『北京文藝』の変遷を概観すると、1958年以降は労働者の作品を中心に掲載する雑誌となったことが見て取れる。しかしながら、労働者の一員であるはずの知青が書いた作品は、1971年12月に刊行が再開された『北京新文藝』試刊第一期以降、文革期に発行された『北京文藝』誌上では試刊五期の3作品を含めても知青の肩書を付けて発表された作品はわずかに6作品しかないことが判明した。掲載された知青文学は典型的な内容の作品で、個性的なものとはなっていない。また、知青を題材にした作品は76年以降、“上山下郷”運動を推進する作品から“扎根〔根を下ろす、農村部に根付くこと〕”を賛美する内容へと変化し、知青を取り巻く政策の変化が見て取れる内容となっていることが分かった。

キーワード 『北京文藝』、文革、知青文学

### 1. はじめに

2018年1月13日『朝日新聞』に「中国教科書『文革』項目削除へ」という記事が掲載された。記事には「文革を発動した毛沢東の過ちを認める表現が削られるとみられる」と、中学2年生の「中国歴史」の教科書の改訂内容を報じている。この記事の内容は、作家方方の数年来の創作スタンスを想起させる。

方方(1955.5-)は知識青年(以下、知青)経験がなかったため、従来文革や知青に言及することが少なかった。ところが「出門尋死」(『人民文學』2004年第12期)にて知青経験を持つ主人公を描くと、「刀鋒上的螞蟻」(『中國作家』2010年第5期)では文革世代の主人公を描き、若い世代が教育として文革をきちんと学ぶことがなく、“成分〔階級区分〕”の良し悪しが

人生を左右したことさえ理解できない状況を示した。さらに、物議を醸した「軟埋」（『人民文学』2016年第2期）では土地改革をテーマに歴史事件を覆い隠すことに対する批判を行っている。その「軟埋」でも文革は歴史的空白となっており、文革前夜に書かれた日記の文言を最後に、文革期のことには触れられない。

このように、いくつかの歴史的事象に関しては、昨今中国では言及しづらい状況が生じている。その状況下で、中国国内の図書館資料のうち文革期の雑誌が処分されている現状がある。文革期の文芸、とりわけ小説の評価は、例え地下文学と雖も、決して芳しくない。それは北島の“當時的地下寫作，特別是小説，處在一個很低的起點。〔当時の地下文学、とくに小説は、低い出発点にあった〕”<sup>(1)</sup>という言葉からも窺える。

つまり文革期の文芸は、その多くが文学的評価という側面で見ると、決して高いものではなく、文学的な価値を求めることが難しい。しかし文芸史を繙くと、文化大革命の項目の最初に必ず触れられる文章がある。それが呉吟「海瑞罷官」（『北京文藝』1961年1月号）を批判した姚文元「評新編歴史劇『海瑞罷官』」<sup>(2)</sup>である。またこの文章こそが文芸界における文革の導火線や開始となったとされるのである。

そこで「海瑞罷官」が掲載された雑誌『北京文藝』が文革期にどのような作品を掲載していたのか、知青文学を中心に概観してゆく。

## 2. 雑誌『北京文藝』

ここで雑誌『北京文藝』について、簡単に見ておく。

雑誌『北京文藝』は月刊誌として、1950年9月10日に創刊された。主編は老舎、副主編は王亜平であった。雑誌は小冊子の形状で、繁体字縦書き、第一巻第六期から第三巻第二期（1951年11月1日）までの刊行が確認でき、その後は休刊となる。休刊の理由は戯曲を中心としていた雑誌『説説唱唱』との両立が難しかったためとされる。しかし実のところ、1951年12月20日に中華全国文藝会聯合会第八次常務委員擴大會議にて、文芸界の学習運動の展開と全国的な文芸誌を調整するという決議にて停刊が決まっている。その一方で、『説説唱唱』を北京市文学藝術工作者聯合会と北京市大衆文藝創作研究会が主催することとなり、老舎が主編、李伯釗・王亜平・趙樹理が副編集となった<sup>(3)</sup>。

つぎに雑誌『北京文藝』は、1955年に『説説唱唱』と統合する形で再度創刊されることになる。北京市文学藝術工作者聯合会を編集者とし、老舎が編集委員と主編になった。その後、1966年5月まで139期が刊行されるが、翌6月から停刊となる。1971年末に試刊として、12月に『北京新文藝』試刊第一期が刊行され、第五期（1972年12月）まで刊行されると、1973年3月から雑誌名を『北京文藝』に戻し、隔月に刊行されるようになった。

1976年第一期からは月刊となり、全国で発行されるようになった。1980年第十期より雑誌名

を『北京文学』に変え、今日でも毎月1日に発行される月刊誌として発刊されている。

### 3. 雑誌の性格

雑誌『北京文学』は2015年に創刊65周年を謳い、節目になる号の紹介を行うなどしていた。ここから、1950年の創刊時から始まった、一つの雑誌と見なしていることが分かる。しかしながら、上述したように『北京文藝』として創刊された『北京文学』は二度の停刊に、間に試刊『北京新文藝』の名を挟んだ三度の改名がなされている。そのため、この間の65年を純粋に一括りとすることができるのかという疑問が浮かぶ。

そこで文革期の『北京文藝』を見る前に、1950年の創刊当初と、55年の再創刊以降の『北京文藝』について、概観しておきたい。

#### (1) 1950,51年

『北京文藝』第一巻第一期、創刊号(1950年9月)「發刊詞」には、

「『北京文藝』は北京市文聯が編輯・刊行する文藝月刊誌である。

組織上、北京市文聯が市文協劇協などの団体会員ではないため、北京の文学と芸術各分野で働く人々を直接的に集めたものである。そのため、『北京文藝』は会員たちの“供献〔(原稿の) 献上〕”と要求の違いから、自ずと総合的な文藝刊行物となり、文学と芸術各分野の創作と批評を受け入れる必要がある。」<sup>(4)</sup>と、述べられている。

また、この「發刊詞」には、のちの『北京文藝』を支えることになる労働者のアマチュア作品を尊重することを含め、北京という都市の変化、学生の創作の支援と戯曲の改革という四点に重きを置くことを述べている。

ところで「發刊詞」冒頭の原稿の集め方と創刊号の目次を見てみると、「自ずと総合的な文藝刊行物と」なるとし、純粋な文芸誌であろうとしたという姿勢が見て取れる。実際、創刊号には老舎「龍鬚溝」(三幕劇)を始め、小説や詩歌や「舞台と銀幕」というテーマの文章などが掲載され、戯曲に関する方針や座談会といった文章以外に政治的な言説が見られない。

著者が現在確認できている当時の雑誌は、残念ながら創刊号と第一巻第四期(1950年12月)、第二巻第二期(51年4月15日)の三冊のみである。第一巻第四期には雑誌全体に朝鮮戦争に関わる文章を掲載していた。第二巻第二期には労働者(公安総体、北京電車修造廠工人)の作品や思想的な文章も掲載されていた。当初から労働者の作品を重視しようとしていたとは言え、創刊号の雑誌の性格から鑑みると、第一巻第四期にはもう『北京文藝』が純然たる文芸誌とは言えなくなっており、労働者の作品は掲載できているものの、学生の作品は措かれていたと言える。

また主編である老舎は『北京文藝』に三幕劇「龍鬚溝」を創刊号から第一巻第三期(50年11

月10日)まで掲載し、同第四期に創作談「怎麼寫快板」、第五期に相声「家庭會議」、第六期に雑文「美国的精神食糧」、第二卷第一期に論文「散文併不“散”」、同第三期に論文「怎樣寫通俗文藝」、第四期に雑文「對於觀摩演出節目的意見」、第五期に太平歌詞「慶祝“七一”」と創作談「態度問題」を發表している。第三卷第一期には話劇「一家代表」(2幕6場)の連載を始めたものの、続く第三卷第二期で連載が途絶えてしまう。(『老舍年譜』、注3、参照)このように老舍ほとんどすべての号に何らかの文章を發表している。

『老舍全集』(人民文学出版社、1999)第十九卷に老舍の日記が収録されているが、一年間すべてが揃っているのは1950年のみで、51年も後述する55年も日記が存在しない。また日記の内容も極めてシンプルで、メモ書きに近い。それでも原稿料や税金に、創作や作品の感想、訪問者などが記され、興味深い内容となっている。しかし日記には『北京文藝』の文字は見当たらない。

『老舍年譜』(p.616)によると、9月5日の「午後編委會」(「一九五〇年日記」p.45)との記述が『北京文藝』の編集委員会の会議を指しているとのことだが、『説説唱唱』の編集委員のほうは『説説唱唱』の名を明記<sup>(5)</sup>していることから、老舍は『北京文藝』には寄稿をしていたものの、『説説唱唱』ほどは編集に携わっていなかったのかもしれない。

そして1951年末に『北京文藝』の停刊が決まり、『北京文藝』の1年強の歴史は閉じられたのである。

## (2) 1955年以降

1955年に『説説唱唱』と統合する形で再度創刊された『北京文藝』は老舍が「發刊詞」(『北京文藝』一九五五年四、五月号、創刊号)を寄せている。

北京市文学藝術工作者聯合会は『北京文藝』を編輯刊行していたが、それも5年前のことである。その「北京文藝」は何号か発刊したが停刊してしまった。それは同時に『説説唱唱』も行っていたため、人手が不十分だったからだ。『北京文藝』停刊後、北京市文聯編輯部は全力で『説説唱唱』にあたってきた。(略)

文章については、『北京文藝』は務めて通俗的であるようにするつもりだ。創作であろうと、理論であろうと、文章については簡明で分かりやすく、読みやすいことを望んでいる。(略)

我々の主な読者の対象は労働者である。しかし、労働者も農業や国防、文化教育など現実生活に強い関心を持っている。だから、我々が選択・掲載する作品は、内容においては労働者を描くことを重視するが、ただ労働者のみに限って描写されるものでもない。(略)<sup>(6)</sup>

このように述べ、読者の主要なターゲットは労働者であり、「通俗的」であろうとしていた

ことが分かる。また1950年当時には言及されていた学生や戯曲の改革といった点については言及されていない。もちろん将来的には若者の作家の育成にも力を注ぎたいとの希望は述べているのだが、「編集部内の人手が不足している」(同注6、p.3)ことを理由に現状では難しいとしている。

このように再創刊当初は、老舎「發刊詞」に述べられているように「労働者を描くことを重視」するだけで、読者たる労働者の作品を掲載することを主眼としているわけではないことが分かる。実際、創刊号には周立波の文章が発表され、アンデルセンの童話の翻訳作品が掲載されていた。

それでも55年という時局からは逃れられず、創刊号から胡風批判の文章が掲載されるなど、政治的な言説が見られる。55年7月号には“堅決肅清胡風集團和一切暗藏的反革命分子〔胡風グループと潜伏している反革命分子すべてを肅清することを堅持する〕”という項目を設け、10編を越える反革命・胡風を批判する文章が発表されており、1950年の創刊号と比較すると政治的な色合いが濃く感じられる。

雑誌の性格が明確に変わるのは、1958年である。58年3月号に労働者たちが発表した作品を転載したのち、同4月号には主に労働者たちの作品が掲載されるようになる。以降はこの傾向が続く。

それでは、なぜ58年に雑誌の性格が変わったのであろうか。やはり思いつくのは、その前年に始まる反右派闘争である。老舎自身も『北京文藝』誌上ではないが、「闘争右派、検査自己」(『曲芸』57年第5期)という文章を発表し、『北京文藝』も57年7月号に「北京市文艺界要積極投入反右派的斗争〔北京市文艺界は積極的に反右派闘争に参加せねばならない〕<sup>(7)</sup>」を掲載した。それ以降、反右派闘争に関する文章が掲載されるようになったのである。

反右派闘争が始まると、それまでの自由な雰囲気が一変する。『文藝報』における変化については、洪子誠『1956：百花時代』(山東教育出版社、1995)に触れられている。ここでは、副総編集であった蕭乾が“右派分子”とされ、百花斉放のときに書いた文章などで批判されることで『文藝報』編集部が混乱することとなったことが紹介されている。そして右派とされた編集委員が次々と『文藝報』から名前を消されていったのである。

そこで『北京文藝』の変化で、気になる点が浮んでくる。1958年1月号に雑誌に毛沢東が『文藝報』に贈った文字が挟まれていたことである。これは『文藝報』が1月から半月刊(11、26日出版)となることに対する広告であるが、全面に毛沢東の自筆の文字が躍り、広告の文言は最下部に細かい文字で1行のみ示されている。挟まれた頁は“春節演唱專輯”の1作目と2作目の間の第3頁目となっており、広告であることも含め、極めて異例の掲載となっている。

毛の文章は有名な詩詞「沁園春・雪」(1936年2月)である。武田泰淳・竹内実『毛沢東その詩と人生』(文藝春秋、1965年)によると、第二十首目にあたる「沁園春・雪」は北方の

雪景色を謳いつつ、「真の国家の主人公」（p. 214）を示した作品である。

老舎は当時『文藝報』の総編集（58年は主編）であった張光年と交流があり、『文藝報』の広告掲載前後の時期は『文藝報』で老舎の「茶館」（『収獲』1957年創刊号）の座談会が行われていた時期でもある。老舎も『文藝報』によく寄稿していた。そう考えると、『北京文藝』に『文藝報』の広告掲載があっても何ら不思議はないのかもしれない。しかし、『文藝報』は当時批判にさらされており、毛沢東からも正副の主編が批判を受けていた。その時期に、全面に毛の「沁園春・雪」を掲げた、一見すると広告にすら見えない『文藝報』の広告頁が掲載されたのである。

この広告掲載のあと、『北京文藝』は58年3月号には「北京大躍進」というコーナーを設け、公社などの挑戦状を掲載したうえで、労働者たちの作品を「転載」したのである。その作品数は一つ一つは小品であるものの、かなりの数の作品を転載している。翌4月号も転載作品を交えつつ、労働者の作品が多数掲載され、以降はこの傾向が続くことになる。

老舎は1957年11月4日から28日までソ連を訪問していたことで、訪ソから年末までの日記も残されている。そこからは周恩来と文藝界のいくつかの問題について話し合いをしたことが分かるが、『北京文藝』ならびに『文藝報』に関わるような記述はなく、老舎が雑誌『北京文藝』の性格が変容したことについて、どのようなスタンスを取っていたのかは不明である。

また『文藝報』の広告については、『文藝報』からの観点や他誌にも広告掲載があったのかなど、分析すべき点が多くあるが、この点については今後の課題とする。

#### 4. 文革期

先に述べたように『北京文藝』は呉晗「海瑞罷官」（1961年1月号）が発表された雑誌である。1965年12月号に、姚文元「評新編歴史劇《海瑞罷官》」が転載され、翌年66年5月号には、文革に関する文章を中心に掲載し、冒頭部には『解放日報』社説を転載し、姚文元「評“三家村”——《燕山夜話》《三家村札記》的反動本質〔“三家村”を評す——『燕山夜話』『三家村札記』の反動的本質〕」を掲載している。

このころ、『北京文藝』は毎月4日に出版されていたが、5月号のみ“本刊本期因故延期至五月十六日出版。〔本刊本期は都合により5月26日に出版延期〕”として出版が遅れたことが示されている。ここから、雑誌内容に変更があったのではないかと推察される。翌6月から停刊し、老舎もこの年の8月24日、太平湖公園で入水自殺をしてしまう。

1971年12月に、『北京新文藝』試刊第一期が刊行される。『北京文学』（2015年第4期）には、“成為‘文革’中全國復刊最早的文学刊物〔文革中、全国でもっとも早くに復刊した刊物となった〕”（表紙裏）と述べられている。

岩佐昌暲『文革期の文学』（花書院、2004）には、「71年11月の『北京文芸』を皮切りに地方

レベルの文芸誌の復刊が始まる」(p. 139)と述べられており、『北京文藝』が文芸誌のなかでは一番早期に復刊したとしている。辻田正雄「中国当代文芸雑誌の変遷」(『神戸大学文学部蔵中国報刊目録』1983年)に収録された《中国当代文芸雑誌変遷図》でも『北京文藝』は71年11月復刊(p. 46)とされているが、本稿では試刊第一期の目次や裏表紙に記載された12月とする。

試刊第一期の内容は、毛沢東語録、レーニンの文章に始まる。続いて「国際歌」「三大規律八項注意」が掲載されている。著名な作家としては浩然の名があるものの、労働者を中心とした構成となっている。また北京下郷知識青年として朝華「我的老師鄭大叔」(小説)が掲載されている。裏表紙裏には「文藝講話」三十周年の文章募集が「《北京新文藝》編集室、1971年11月」と付した形で掲載されており、原稿の募集は翌年5月までとしている。この原稿募集は試刊第二期にも1972年3月の日付で再度案内がされているが、こちらは雑誌内ではなく印刷された紙が挟まれていた。

この原稿募集から、『北京文藝』の復刊は「文藝講話」三十周年を祝うためであったことが窺える。

試刊第一期掲載の毛語録は「中華人民共和国第一期全国人民代表大会第一回会議における開会の辞」(1954年9月14日)、「文藝講話」と『人民文学』創刊号(1949年10月25日)に揮毫された“希望有更多好作品出世”の3つで構成されていた。『湖北文藝』(1973年5月、創刊号)も毛自筆の“希望有更多好作品出世”から始められているように、文芸誌の創刊に適当な文言となっていたようだが、『湖北文藝』が一文だけであったことに対し、試刊の方は段階を踏んで、創刊を祝う文章に導いているように見える。

1972年5月(試刊第三期)の目次には冒頭部に、「紀念毛主席《在延安文藝座談会上的談話》発表三十周年」という文字が模様で囲われたものを掲げ、続いて「堅持毛主席革命路線就是勝利——紀念毛主席《在延安文藝座談会上的談話》発表三十周年」という『人民日報』、『紅旗』雑誌、『解放軍報』の社説から始めている。雑誌掲載の文学作品は労働者を中心とし、解放軍軍人や中学生、それと集団創作の作品が掲載されている。

1972年12月の試刊第五期で『北京新文藝』の名称での出版が最後となり、1973年第一期(73年3月10日)からは隔月刊の『北京文藝』として出版されるようになる。それと同時に原稿募集も掲載されているが、“編輯方針是：貫徹執行毛主席革命文藝路線、…〔編集方針は、毛主席の革命文芸路線を執行することを貫き、…〕”(p. 80)、“以革命樣板戲為榜樣〔革命模範劇を手本とし〕”(同)などの文革期特有の内容となっている。劉少奇らに対する批判も含まれており、時局がよく反映された内容が見て取れる。

文革期に発行された雑誌では付録とも言うべき、雑誌以外の紙媒体が挟まれていたことが2度あった。1974年第1期には“把批林批孔的斗争進行到底”として、8頁の“批林批孔詩画増頁”(1974年2月)が挟まれ、1975年第1期には“慶祝四屆人大勝利召開”専号として、1975年元年のB5の2倍(B4)4頁分(1枚の紙)の赤と黒の二色刷りのものと、『北京文

藝』増刊（1975年1月）として目次と5編の文章を掲載した28頁もの大部が付されていた。1枚ものは詩や絵を掲載した作品集となっており、75年には二色刷りとなっているのが印象的である。

1976年第一期からは、月刊で全国にて発行されるようになる。76年第十期には毛沢東逝去のため毛沢東追悼の内容が生まれ、76年第十一期、第十二期では、華国鋒主席を讃え、四人組を批判している。

## 5. 『北京文藝』誌上の知識青年文学

ここでは、文革期の文芸、とくに文革後期とも言える文芸誌の再創刊後の文芸における、知識青年たちの文芸作品の動向を見てゆく。例えば、雑誌『湖北文藝』ではほぼ毎号1作は知識青年の作品が掲載されており、多い時にはその掲載数は10作にも上っていた。

停刊するまでの雑誌『北京文藝』は労働者の作品を主に掲載する雑誌であったことから、知識青年たちも労働者の一員であることを鑑みれば、『湖北文藝』のように多くの作品が掲載されていてもおかしくはない。

まず『北京新文藝』試刊に掲載された知識青年文学を見てみると、試刊の五期では以下の三作品が掲載されている。

第一期（1971年12月）：朝華（北京下郷知識青年）「我的老師鄭大叔」（小説）

第二期（1972年3月）：丁東（下郷插隊知識青年）「書記的鎬」（詩歌）

第四期（1972年10月）：由岑（北京插隊知識青年）「黄河暢想曲」（散文）

いずれの内容も、文革期の知青文学の内容と言えるだろう。

例えば、朝華「我的老師大叔」は一人称語りで、主人公の小徐が松嶺大隊に行く。主人公は“作一個貧下中農歡迎的知識青年〔貧下中農に歓迎される知識青年になるのだ〕”（p. 25）という決意を抱いて、農村に入った。ある農民から「親切に」畑のすき方を教えてもらうものの、根っこを傷つけないようにという注意を受けていなかったことで、鄭煥榮おじさんから注意を受ける。その後、鄭おじさんからすき方をしっかりと教わり、鄭さんは彼が基本をマスターできるようにまで面倒を見てくれたのであった。

実は、「親切に」教えてくれたのは李広財という富農出身の人物で、鄭おじさんは大隊貧協主任であり共産黨員という人物となっている。文革期の知青文学では、富農や地主であった人物がよからぬ考えをもっていたり、知青の革命的事業を邪魔しようとし、そこに共産党の指導者が知青をサポート・支持するという構図が多く取られているが、「我的老師鄭大叔」も同様の流れとなっている。

いくつかのエピソードが語られたのち、鄭おじさんが毛語録を学ぼうと、分からない字を主人公に教えを受けようとする。その姿勢に主人公は感銘を受け、鄭おじさんのような優秀な貧



下中農を教師とし、“要一輩子作貧下中農的小學生〔一生貧下中農の小學生になる〕”(p. 29)と密かに誓って、物語は幕を閉じるのである。

五期で3作品というのは、『湖北文藝』に比べると少ないという印象を受けるが、試刊から『北京文藝』に戻ると、知青文学はほとんど掲載されなくなる。つまり試刊と『北京文藝』との違いは、この知青文学の掲載率にあると言える。

1973年第一期(1973年3月)に『北京文藝』に名前を戻し、試刊ではなく普通の刊行物となる。それ以降は停刊前とほぼ同じ雑誌スタイルに戻り、労働者を中心とした作品を掲載している。

ここで『北京文藝』掲載の知青文学を見てみると、1975年までの掲載作品で著者が知青であることが明確に示されている作品は以下の作品となる。

由岑(北京挿隊知識青年)「華山路」(散文)『北京文藝』73年第2期(73年5月)

王振軍・辛曉峰(密雲県挿隊知識青年)「沃土新苗」『北京文藝』74年第4期(74年7月)

魏威(平谷県知識青年)「火眼金睛識豺狼」(詩歌)1975年第6期(75年11月)

魏威「火眼金睛識豺狼」は“工農兵評《水滸》歌謠”の一首であり、作品は知青に関するものではない。つまり知青文学は実質わずか二作品と言える。由岑は試刊時にも寄稿しており、馴染みの知青といえるだろう。これらの作品内容はいずれも英雄人物を描き、上山下郷はメインテーマとはなっていない。

次に作者が知青ではないが、知青をテーマにした作品について見てみると、すべて詩歌となっている。その詩歌作品には以下のようなものがある。

①1974年第5期(74年9月)

王琳(西西北小学三一班)「上山下郷把根扎」…上山下郷への憧れ

②1974年第6期(74年11月)

西西北小学紅小兵児歌創作組「看姐姐」…上山下郷した姉を誇りに思い、自分も上山下郷に参加するという決心を示す

③1975年第2期(75年3月)

高艾軍「扎根鞋」…祖母と母が生産隊に参加する(父方の)おばに靴を作る

李瑞明(二七機車車輛廠)「送子下郷的前夜」…出発前夜の様子

④1975年第4期(75年7月)

張東九(半壁街小学)「向陽村里把根扎」…知青を受け入れた側の様子(歓迎)

この五作品が“上山下郷”をテーマとしており、いずれも“上山下郷”を推進する作品となっている。

1976年に入ると『北京文藝』は月刊誌へと変わる。知青に関する作品傾向も“上山下郷”運動を推進する作品から“扎根〔根を下ろす、農村部に根付くこと〕”を賛美する内容へと変化する。

①1976年第1期

由岑「春風又緑扎根園」（散文）

身分記載なし。文中に“知識青年”と示す。果樹園に“扎根園”と名付け、苦難を乗り越え、農民となるという主旨。文革期の知青文学の典型的内容となっている。

②1976年第5期

王不天「小亮趕車」

身分記載なし。“東風知青園芸場”が舞台。“扎根”が主題。

③1976年第7期（詩歌専号）

工農兵評刊という欄に「多刊登知識青年扎根農村的作品」（薛元超・劉登榮、北京大学中文系工農兵學員）が掲載。この年の上半期に5作程度の作品が掲載されたというが、作品を見ても知青文学と言えない作品も含まれる。ここで上げられた作品を上げられた順のまま見てみると、「小亮趕車」「胶林新曲」（李惠薪、1976年第5期）「深山出了大学生」（李学鰲、1976年第4期、詩歌）「春風又緑扎根園」「紅焰燦燦」（江溶、1976年第4期、散文）などとなる。

同号に「一代新人」という欄に9作の詩歌が掲載されており、内容は“上山下郷”の知識青年を歓迎するものや、父親の心情、“扎根”などとなっている。

④1976年第8期

郭小聡（知識青年）「堅定的步伐」（詩歌）…“下郷”先を賛美

⑤1976年第10期

王徳修（大興県龐各庄公社党委書記、知識青年）「広闊天地絵新図」（詩歌）

…毛主席の追悼

③の「多刊登知識青年扎根農村的作品」に触れられた作品のなかには、李惠薪と李学鰲の作品が含まれている。李惠薪は『瀾滄江畔』（人民文學出版社、1976年5月）<sup>(8)</sup>の出版で知られているが、『瀾滄江畔』は知青を描いた作品ではない。「胶林新曲」はシーサンパンナを舞台に、すでに“扎根”した北京から来た知青であった袁朝が医者でありながらも、さまざまなことに真摯に当たっているさまを描いている。つまり本作は正確には知青自身を描いているわけではなく、“扎根”後の物語と言える。

李学鰲は1951年から作品を発表し、56年には中国作家協会に加入している詩人である。「深山出了大学生」は山村の貧農の娘が大学生になったことを詠っており、“扎根農村”とは正反対の内容と言える。

江溶「紅焰燦燦」についても触れておくと、ある記者が新中国建国の日が誕生日という洪焰という少女との出会いを回顧するというもので、彼女が紅衛兵を経て、知青となり、「大寨に学ぶ」ことで成功を収めた山村で奮闘する模範的な人物であることに触れている。印象的なのは紅衛兵が「懐特路」の標識を「紅衛路」に変える場面で、ヒロインの洪焰の颯爽とした様子

が描かれ、なんとも誇らしい雰囲気がよく伝わってくる。

以上のように、『北京文藝』に掲載された知青作品は限られているが、1976年になると“扎根”に力点を置いた作品の点数がぐっと増え、知青を農村に根付かせることが喫緊の課題であったことが窺われる。

## 6. 終わりに

雑誌『北京文藝』には新時期以降に活躍する作家の作品も掲載されていた。例えば、陳建功は文革中に「歓送」(1973年第2期)、「歓呼你、紅色的“公報”」(付録“慶祝四屆人大勝利召開”専号、1975年第1期)、「尚奎師傅」(1975年第6期)、「荷澤驚瀾」(1976年第8期)と作品を発表し、79年以降もコンスタントに作品を掲載している。1973年当時は「木城澗煤砒工人」と記し、労働者として作品を掲載していた。

また鄭万隆は「一個心眼」(1973年第3期)、「風雪河灣」(1974年第2期)と作品を掲載し、79年以降も作品を掲載している。鄭万隆は『北京文藝』には73年第3期では“工人〔労働者〕”とのみ記し勤め先を記載していないが、陳建功と同じく労働者として作品を掲載していた。『山丹花』(北京人民出版社、1973年8月)に収録された「杏紅似火」では「北京農業一廠」と記しており、陳建功とは『火花』(北京人民出版社、1973年11月)でともに作品を発表している。

さらに文革中も文革後も浩然の作品がコンスタントに掲載されている。文革期の文学を形容して「一花独放」と言われるときの「一花」はまさに浩然を指しているのだが、その浩然作品についても分析が必要であるが、今回は知青文学ではないことから、浩然作品は触れていない。

文革以降では張潔が78年第11期から作品の掲載を始めており、『北京文藝』が新時期文学においても一定の役割を果たしていたと言える。

1958年以降、新時期が始まるまでは労働者の作品を中心に掲載されてきた『北京文藝』だが、知青の作品はほぼ掲載されていないことが分かった。77年以降は知青に関するテーマが“上山下郷”から“扎根”に移り、“扎根”を題材にした作品は“上山下郷”を題材にした作品よりも多く、知青たちを北京など都市部に帰らせず農村に根付かせようという強い意志が感じられる。

ところで、北京の知青たちの文芸活動については、雑誌『北京文藝』にはほぼ反映されていないと言える。楊健『中国知青文学史』(中国工人出版社、2002)などに触れられているように、文革中北京の知青たちは北京の文芸サロンで活動していた。1972年には、北京のサロンで詩歌のモダニズム旋風が吹き荒れた<sup>(9)</sup>。その原動力となったのが白洋澱(安新県)に“挿隊〔生産隊に入る〕”していた北京の知青たちであった。『中国知青文学史』によると、白洋澱の知青は約600人おり、うち半分が北京から来ていた。

“1967-1969年當地發生武鬥，直到1975年派性鬥爭仍然很激烈，公社無暇顧及知青的思想和文化活動。白洋澱形成一個政治上相對寬鬆自由的小生態圈。〔1967-1969年にここ（白洋澱）で武力闘争が起り、1975年に到るまで派閥闘争は依然として激しく、公社は知青の思想や文化的な活動に気を配ることもなかった。白洋澱は政治的に比較的緩やかで自由な生態圏となっていた〕”（同注9、p. 239）とされ、北京から大量の書籍がもたらされ、北京の文学サロンで流行していた書物も入ってきていた。白洋澱の地理的要因もあり、各地の知青がやって来ては交流し、“文化交流圏”（同注9、p. 239）を形成していた。

さらに岳重（根子）と栗世征（多多）が70年冬に徐浩淵のサロンに参加したことで、岳重の詩歌は各地のサロンに知れ互り、上海でも手抄本が出回っていたという（同注9、pp. 240, 241、参照）。

白洋澱は人の出入りはもちろん、雰囲気も比較的自由に、その様子は芒克の小説『野事』（湖南文藝出版社、1994）からも窺うことができる。“在‘文革’時期，白洋澱成為了文学青年們的一片樂土。〔“文革”期において、白洋澱は文学青年たちの樂土と化していた〕”（『中国知青文学史』p. 248）ように、白洋澱では北京知青の60人ほどが詩歌グループを構成し、互いに密に連絡を取り合っていた<sup>(10)</sup>。

楊樺「白洋澱插隊回憶録」（劉福春・賀嘉鈺編『白洋澱詩歌群落研究資料』中華文学史料学会・北京師範大学国際写作中心、2014）によると、白洋澱は北京から約150kmと近く、多くの革命積極分子から逃れることができ、生活もそれほど苦しくはならない豊かな土地ということで、家に何がしかの問題を抱えていた子女が集うことになった。そのため、白洋澱の知青は幹部の子女や知識人の子女が大部分を占め、一般家庭では手に入らないような資料や書物が読める環境があった。また個人個人で“插隊”に来ることで、集団で生産隊に入った知青たちと異なり、管理する人もなく、自由な空間となり、本を読むのも議論するのも自由で、詩歌を書くことにも制約が加えられることもなかった。その分、生活面での援助や支援が得られず、生活には困難があったようだ。

このように北京の知青たちは地下とは言え、自由な創作空間を得ていた。白洋澱やサロンでの交流を通じて、作品がそれなりの知名度を得ることもできたことを鑑みると、北京の知青たちが『北京文藝』のような刊行物に作品を掲載することも望まなかっただろうし、掲載するにしても作品がさまざまな制約を受けることも望まなかったであろう。

一方、『北京文藝』からしても、北京でサロンに出入りしている知青たちに自由に作品を書かせることも、モダニズムや意識流などの文革期の創作手法とは相容れない作品を掲載することもできなかつたであろう。

つまり北京や北京近郊には知青文学の書き手はいても、掲載可能な作品を安易に依頼することもできない状況にあった。その結果、『北京文藝』誌上では知青自身の手による作品に限られ、“上山下郷”や“扎根”を題材にした作品はその多くが知青以外によって書かれることに

なったのであろう。

〔注〕

- (1) 査建英『八十年代訪談録』Oxford University Press、2006、p. 58
- (2) 初出は『文匯報』1965年11月10日。『北京文藝』には65年12月号に掲載された。
- (3) 張桂興編撰『老舍年譜』（修訂本）上海文藝出版社、2005、p.669、参照
- (4) p. 7、“ ” および〔 〕内引用者

原文は、以下。文字は原文のまま。

『北京文藝』は北京市文聯編刊的文藝月刊。

在組織上，北京市文聯並沒有市文協劇協等團體會員；牠直接的團結了在北京的文學與藝術各部門的工作者。因此，『北京文藝』，由於會員們的供獻與要求的不同，必然的是個綜合性的文藝刊物，必須容納文學和藝術各部門的創作與批評。

- (5) 1月24日、3月25日、4月23日、7月8日、8月27日、11月23日。2月16日と4月1日は原稿料に24万、19万受け取りの記述がある。
- (6) 老舍「發刊詞」『北京文藝』一九五五年四、五月号、創刊号、pp. 2,3

原文は、以下。

北京市文學藝術工作者聯合會曾經編刊過《北京文藝》，說起來已差不多是五年前的事了。那個《北京文藝》出過幾期就停了下來，因為同時也辦《說說唱唱》，人力實在不夠用的。《北京文藝》停刊以後，北京市文聯編輯部就全力辦《說說唱唱》了。

(略)

在文字上，《北京文藝》將力求通俗。無論是創作，還是理論，我們希望在文字上都能夠作到簡明淺顯，容易閱讀。(略)

我們的主要讀者對象是工人。但是，工人也關切著農業、國防和文化教育等等現實生活。所以，我們所選用的作品，在內容上注重描寫工人，而不只限於描寫工人。

- (7) 掲載されたものは、大書されたゴシック体の字体が使用されている。また字体は掲載のままとした。
- (8) 1972年11月に初稿、75年11月に改稿している。
- (9) 『中国知青文学史』p. 238、参照
- (10) 同(9)、p. 238、参照

(せべ けいこ 中国学科)

2019年11月15日受理